

# に立ち返る

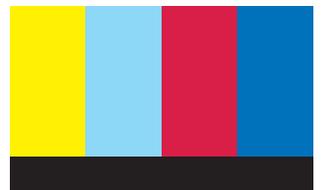


## What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立され、現在36の国と地域に組織を持つ国際協力NGOです。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。

## OISCAの標章



オイスカの世界観がこの標章に象徴的に表されています。天(青)、火(赤)、水(水色)、地(黄)、それにこの4要素を調和的に活動させ、人類万物のいのちを生成発展させる源である「宇宙」を表す黒です。

## OISCAという名称の意味

**O**rganization 機構  
**I**ndustrial 産業  
**S**piritual 精神  
**C**ultural 文化  
**A**dvancement 促進

人間の生存に不可欠な三要素「産業・精神・文化」のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。

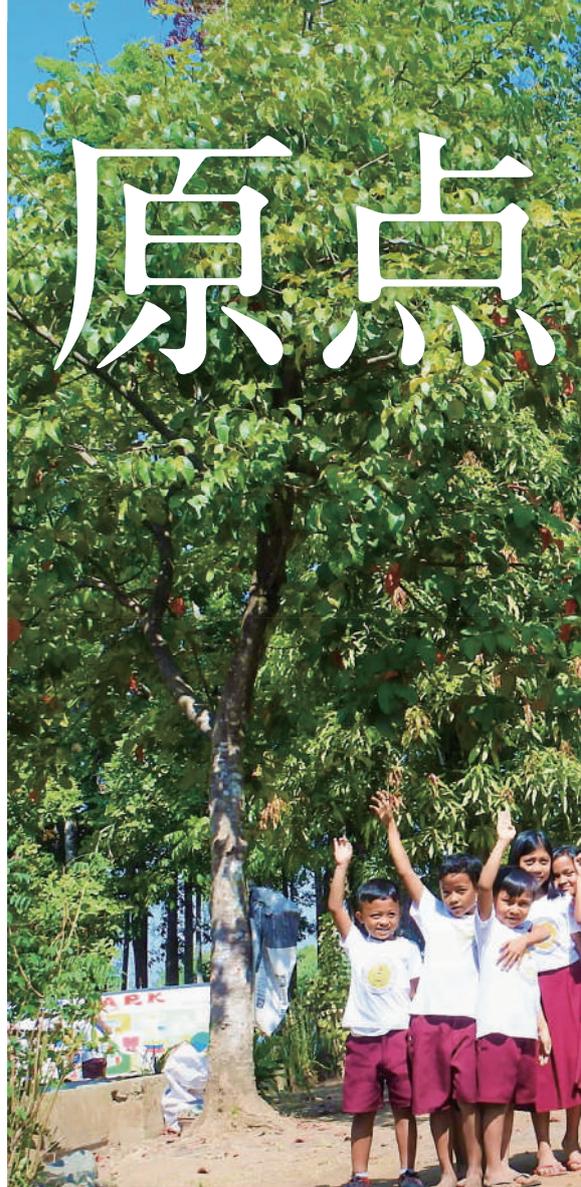
## 今月の表紙写真

2021年は丑年。ウシも乳牛、肉牛、闘牛とさまざまですが、こちらの牛は農耕牛。荷物も人も運べば、畑も耕す農家の優秀なパートナー。その上、ガソリン不要のエコな働き者なのです。(ミャンマー)



(上から時計回り)ムディット小学校では、親の世代が植えた木が育ち、防風林となって子どもたちの学校生活を守っている(フィリピン)／歓迎の踊りをしてくれた子どもたちと(ミャンマー)／チャウカン村の皆さんと記念植樹(同)／森が与えてくれるたくさんの恵みに感謝(タイ)

# 原点



オイスカは、今年創立60周年を迎えます。また、1991年にスタートした「子供の森」計画は30周年となります。子どもたちを支援するチャリティコンサートをライフワークとする歌手の雨谷麻世さんも「子供の森」計画の賛同者の一人。地球のよりよい姿を思い描き、未来につなぐ思いを語ります。



特集

〈新春対談〉

雨谷麻世

ソプラノ歌手

中野悦子

公益財団法人オイスカ理事長

**中野** 今日是对談のお時間をいただきありがとうございます。

**雨谷** たいへん光栄なお申し出をいただき、喜んでおります。

**中野** オイスカは2021年10月に創立60周年を迎えますので、あらためて原点に立ち返り、そして未来に向かって歩み出すような、そんな1年にしたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

**雨谷** 60周年はすごく大きな節目ですね。私は2019年に歌手として30周年を迎えましたが、オイスカさんに比べるとまだまだですね。

**中野** 多くの方たちの思いや

努力で積み重ねてきた60年で、関わってきた方たち皆さんが、それぞれにできない思いがあると思います。

**雨谷** つなげていくって大切なことですね。原点に立ち返るとおっしゃいましたが、私も30周年の節目のタイミンで、「原点回帰」を意識しました。昨年11月にコンサートを川崎市で行いましたが、これも原点回帰の一つなんです、川崎がふるさとなので。常に走り続けているばかりではなくて、一度ちょっと立ち止まってみたいといった感じかもしれません。

**中野** 30周年ということは、ソプラノ歌手雨谷麻世は、平成と共に歩んで来たというこ

とです。

**雨谷** おっしゃる通りです。

思えば平成の時代を、ずっと音楽活動を続けてきたんだなあ、感慨深いです。

**中野** 長くチャリティコンサートを続けておられて「子供の森」計画（以下、CFP）にもご支援をいただいています。最初から子どもをテーマにされているんですか。

**雨谷** やっぱり気になるのは子どもですね。歌手として活動を始めた頃、どうやって皆さんに歌を聞いていただくか、

知っていたかどうかを考えて、まずはコンサート作りから始めました。そのためには、会場となるホールを予約して、パンフレットやチケットを作つて、皆さんに会場に足を運んでもらうために営業もしなければなりません。そういうことを続けて生計を立ててきましたが、ある時ふと思つたんです。「皆さんがチケットを買つて、大事な時間を使ってコンサートに来てくださるから私は生きていけないんだ。こんなにありがたいことはない」と。それで、直接ではなくても、何かお返しをしなくちゃ申し訳ないと思つて、チャリ

ティができないかと考えたのがきっかけです。はじめは住んでいたことがある地域の社会福祉協議会に寄附をしていきましたが、一つの基金の中にひとつと入ってしまうので、何かテーマをもつてチャリティをしようと考えてたどり着いたのが子どもでした。私自身があるさと川崎の下町で、地域の人たちにも育ててもらつたという実感があつて、楽しい子ども時代を過ごしてきたものだから。いい時代でした、昭和の。

**中野** 子どもたちが遅くまで遊んでいけば、大人たちが「早く帰らなさいよ」と心配して声をかけてくれました。自分の子どもよその子ども関係なく、みんな目をかけて育てていた時代でしたね。

**雨谷** 私もよく近所の人から怒られていました。そういうことも含めて幼少時代がすごく楽しかったの、子ども時代につらい思いをして育つというところが本当にかわいそう。大人になつてからのことは、自己責任ですが、子どもたちを取り巻く環境は自分たちではどうすることもできませんから。でも、どこに支援

をしたらいいか分らないので、いろいろな方に教えていただいて、WFP（国連世界食糧計画）にたどり着きました。WFPが横浜に日本事務所を置いたのが1996年で、その翌年に支援しました。あとはモンゴルのマンホールチルドレンとか、ルーマニアのエイズの子どもたちの支援なども行いました。ルーマニアは、横浜市がコンスタンツァという町と姉妹都市になつていて、コンサートに行つてくれと言われて。エイズの子どもたちの病院や学校のようなところもあつて、そこで歌わせてもらったのがきっかけで、ルーマニアの子どもたちの支援にシフトしたりしながら、子どもをテーマにチャリティを続けてきました。

そうした中、子どもの未来を考えて、ふるさとである地球を大事にする活動が必要だと思ふようになったんです。日本にはせっかく「鎮守の森」というものがあるのに、そういう大事なものを忘れて、日という話も聞いたりして、日本人が持つ素晴らしい精神性にも気づかされました。それが02年のことです。CFPも



雨谷麻世（あまがい・まよ）

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。川崎市名誉文化大使。奈良県吉野町観光大使・長崎県五島市ふるさと大使。宇喜多秀家生誕450年PR大使。1996年より「子ども」と「鎮守の森」をテーマにチャリティコンサートを続け、2010年には、オリジナルソング『僕にできること』が小学5年生の音楽教科書に掲載される。「NHK歌謡チャリティコンサート」「徹子の部屋」「NHKラジオ深夜便」等に出演。神奈川県で開催された「第61回全国植樹祭」では天皇陛下の御前で君が代を独唱。世界遺産・厳島神社で奉納コンサートを行うなど多方面で活躍、昨年は「デビュー30周年記念リサイタル」で特別ゲストのさだまさし氏と共演、反響を呼ぶ。

鎮守の森に通じるものがありますよ。その頃にオイスカのことを知りました。活動がすごく多岐にわたつていて、とても尊敬しています。

**中野** 思いついて一人でチャリティを始めて、ずっと続けているのもすばらしいことですよ。

**雨谷** 何も分からずにやみくもに始めたようなものですが、決めたことをやり続けること、そして口に出して言い続けることって大事ですね。そうすると周囲の人たちが導いてく

れるんです。「それをやりたいならここに行きなさい」「そういうことならこの人を訪ねなさい」って。環境分野の活動をされている方とだんだん知り合つたりして、オイスカの方ともそうやつてご縁ができました。私が理想としていたことを全部やつていらつしやるので、今日お話をうかがうのを楽しみにしてました。海外の子どもたちの支援もテーマにしているので、現場にも行つてみたいと思つていま

# 海外の森づくり

**中野** 海外でマングローブ植林も体験されたそうですが、どちらに行かれたんですか？

**雨谷** マングローブは、ベトナムで植えてきました。ミャンマーにも行ったことがありますが。こちらは中央乾燥地域のチャウカンという村で、首都から飛行機で1時間程飛んだところでしたが、本当に乾燥している地域でした。

**中野** オイスカも中央乾燥地域で研修センターを作って、

そこを拠点にCFPも展開していますし、先ほど話題になっていたWFP事業の連携パートナーとしても活動しています。乾燥地域ですから、最初はお米を作るのも難しく、

川から水を引く水路を作るところから始めました。

**雨谷** 日本の団体が給水車を寄附している話も聞きました。オイスカではインフラ整備から始めているんですね。そこが重要なところですから

ね。もう何年ぐらいになるんですか？

**中野** 23年ぐらいでしょうか。

**雨谷** うわー、すごい。まだ、簡単に現地に入れるような状況ではない頃だったと思いますが、よく行かれましたね。先駆け中の先駆けとでも言いますか……。

**中野** 最初から今の状態を戦略的に作ってきたわけではなく、自然の流れの中で、都度必要なことを積み重ねてきたということかもしれません。

雨谷さんも言われた通り、いろんなつながりの中で、見えてくること、動いていくことってありますよね。現地政府や自治体からの要請で動くこともあれば、自分たちが「これは大変だ」という課題に直面して、その解決のために取り組んできたものもある。そうやって各国でいろんなプロジェクトを進めてきて今のオイスカがあると思います。

**雨谷** 自然の流れではあるけれど、この道と決めてどんどん進めてこられたというのが素晴らしいです。

**中野** CFPもそうでした。オイスカでは、1980年からアジア地域で植林活動を始

めました。やはり地域住民にとっては、貧しさゆえに継続して植林地の管理をして木を育てていくのが難しかった。

それで、出てきたアイデアが子どもを対象に、環境教育もセットにした森づくりに取り組もうというものでした。ちよつと遠回りかもしれませんが、子どもたちの意識を変えるところから取り組もうと、CFPが誕生したのです。やってみると、子どもが植えた木は大人も大事にしてくれる。それどころか、「木を植えましょう！」と言ってもできなかったことが、子どもたちを対象にしたら、大人たちも一緒にやってくれるようになった。

植林をしても、その益を感じるのには10年も20年も先のことです。だから、今日明日食べべ

ることを考えなければいけない大人の私たちは、どうしても苗木の世話に熱心になれない部分があったんでしょうね。この活動も今年で30年になります。

**雨谷** すごいですね。対象を大人から子どもに切り替える柔軟さですが、「環境」なんてキーワードはまだ聞き慣れない時代ですよ。環境に関

する議論が一般的になってきたのは最近ですから。

**中野** それも自然な流れです。計画性がなかったとも言えるかもしれませんが、その時々

の要請に応じて対応してきたんです。オイスカが最初に活動をスタートしたのはインドでした。干ばつで食べるもの

にも困窮する状況で、現地から支援の要請を受けましたが、創立者は「食べ物を送っても食べたら終わりだから」と、食糧増産のための農業技術を教えられる篤農家の方たちを派遣したんです。最初に行かれた方たちはすごく苦労されました。宗教の違い、食べ物

の違い、そしてカースト。何としてもたくさんお米を作つてあげたいという思いで、現地に着いたその日から田んぼに入つて作業をしている日本人を、あぜ道から現地の人が眺めている写真があるんです。

現地の人たちは、田んぼに入るのにはカーストの低い人だと思つているから、「一緒に作業をやるう」なんてことにはならず、ただ眺めている。そういう体験もしながら、インド

の次はフィリピン、その後は……と活動地域を拡大しながら



ベトナムでのマングローブ植林

## 木と気

ので、本当にいい皆さんとお友達になれたし、いいお話も聞かせていただいた。そういうものが宝物だと思っ

そして大事な時間を使ってコンサートに来て下さるとい

い出しました。雨谷 命を懸けた仕事ですね。私はとてもそこには及びませんが……。

雨谷 日本人は「気」も好きだし、「木」も好き。木や森を大事にしてきた民族だからこそ、国土の70%以上が森林に覆われているわけですよ。木を伐ったらまた植えるとい

ら、食糧増産に向けた活動をしている中で、今度は水がないという問題に直面しました。日本では木を切ったら植えるのが習慣ですが、アジアの国々の多くは切ったらおしまい。それで山を見たら木がなくなっていて、だから水がないんだと気づき、それなら自分たちで木を植えよう、と。これまた自然の流れです。

雨谷 なるほど、そこから始まっているんですね。

中野 ええ、自然の機運に従って80年代から植林を始めて、そして10年たってCFPにつながりました。

雨谷 計画性がないとおっしゃいましたけど、私なんかも

中野 コンサートに来てくれる人がいるから生きていける、だから恩返しを、と思う感性が素晴らしいですね。

中野 東日本大震災の原発の事故で、緊迫した現場で働く人を募った時に、山陰で原発に勤務していて定年退職された方が来られたそうです。地域的に離れていて、福島原発とは無関係なのに、その方は「今まで原発で生かしていた

雨谷 そうですね。心が豊かになる。私は「木」と心の「気」って同じだと思っていて、やっぱり「木」がない場所にとたら心が弱くなってしまうから、「気」も枯れる。それで病にもなる。モノも必要だけど、心も元気じゃなかったら、幸せじゃないし、豊かじゃない。

中野 日本人の自然に対する感性は、脳の構造そのものが違うという話を聞いたことがあります。例えばコオロギの鳴き声に秋の風情を感じるとか。

つと無計画でやってきました(笑)。今でこそ年に4回チャリティコンサートを開催すると決めています。2002年よりも前は、かなりランダムに、年に6回やったりしていました。1年間の予定が全く決まらずでなくて、一つ終わったら次のコンサートを決めて……といった具合で。だから今よりも忙しかったし、馬車馬のように仕事をしていました。ただ、自分で動くとい

雨谷 右も左も分らず始めた最初の頃、町内会を訪ねると、「行くからね」ってチケットを買ってくださって、その時にずしっと来ました。この人が私のためにお金を払い、

中野 日本人は「気」を大事にしていますね。大気、空気、それに雰囲気といったところにも「気」があって、「気」を読むといった表現もあります。昔は米の字(氣)を書いていましたね、米の文化の日本と深くかかわっているように思

中野 日本人は「気」を大事にしていますね。大気、空気、それに雰囲気といったところにも「気」があって、「気」を

雨谷 雑音に聞こえないというところですよ。自然と共に生きてきた中で培ってきた感性や日本人らしさを、私たちはもう一度学び直す必要があるのかもしれない。そうすれば心も元気になっていく

ろいろな方と直接お会いする



のではないのでしょうか。

**中野** 日本は、雨が降って自然に木が生えていて、そうした緑の中にいけば、気持ちも和らいでいく。気候や風土によって育まれる環境が、そこに住む人の気性にも大きく影響しますよね。40年ぐらい前にそれを実感したことがありました。故中野良子総裁の秘書として海外に行く機会もあり、要人との面会などの合間を縫って、地元の市場へ足を運んで買い物をするのが私の楽しみだったんです。ただ、パキスタンに行った時だけは、ホテルから外に出るのが怖く行けなかった。砂漠のような場所にホテルがあって、周囲に緑が全く見えないことで不安が募り、怖く感じてしまったんです。見渡す限り乾いた土地が広がっていて、そこに家がぼつぼつと建っているのを見た時に、「緑のない街だ」と感じました。あの光景は忘れられないです。

いといけないのに、当然のことと受け止めてしまっていて、ありがたみに気がついていない。恵まれすぎているということですね、水が豊富に使えるこの環境もそうですよね。

**中野** オイスカでは、雨谷さ



も関係が深いWFPや(国)国土緑化推進機構などから助成を受けて、インドネシアやミャンマーのCFPの参加校や周辺地域の学校で、子どもたちの衛生環境を整えるために雨水貯水タンクやトイレ、手洗い場などの設置も進めています。そうした学校の子どもたちが本場にうれしそうに顔を洗っている写真(P8)があつて、手を洗うというよいな表情なんです。日本の子どもたちにも、今のこの環境はとても恵まれていることが理解できるような学びや体験をしてもらいたいと思います。

**雨谷** 日本の子どもにとって、

最初からいろいろな環境が整い過ぎてこの状況は、必ずしも幸せじゃないのかもしれない。公園でもどこでも蛇口をひねれば水、しかも飲めるレベルの水が出てくるのが当たり前だと思つていまして、出なかつたら「なんで出ないの」って不満に思うぐらいです。水でもモノでも、ないからこそ、それが手に入ったときの喜びというのが1

## 体験からの気づき

と直接会つたり、その場に身を置いて体験、経験したりすることは、人間にとって大切なこと。いくらテレビで見たといつても、それはバーチャルな世界ですから。コロナの影響でますますバーチャル化が進んでいますが、人間にとって大事なものは決して変わらないと思います。

00倍にもなりますから、子どもたちにとっては、手洗いの場ができた喜びは大きかったのですね。

**中野** 本当に、「見て見て！水が出るんだよ」ってアピールしているような顔なんです。

**雨谷** 微笑ましいですね。  
**中野** あの写真を見て、水環境の整備支援の重要性を感じました。こんないい顔をしてくれるなら、担当者もやりがいを感じると思います。

**雨谷** 写真でも、子どもたちの笑顔はやる気につながります。結局のところ人対人です。最近ではコロナ禍でリモートやオンラインが進んでいます。それも大事ですが、人

**中野** オイスカでも90年代頃から、日本の若い人たちが海外に派遣して、植林活動を通じて現地の生活も体験するプログラムを続けてきました。開発途上国の現状を知り、日本とは違う不便さを体験することで、自分たちの暮らしを振り返ることができるんですね。それと、静岡県にあるオイスカ高校は1983年にできた学校で、ここでも当時からそうした教育を続けています。先日、卒業生の父兄がこんなお話をしてくださいました。その方の娘さんが在学中にインドへ短期留学をして、帰ってきた日の夕食時に、いきなり泣き出したそうです。



オイスカの支援で設置された手洗い場で笑顔を見せる子どもたち  
(上：インドネシア/下：ミャンマー)

お父さんが驚いて理由を聞く  
と、「これが当たり前だと思っ  
ていたけど、インドでいろい  
ろ見てきて、そうじゃないこ  
とが分かった」と。路上で物  
乞いをしている子どもたちの  
姿をはじめ、日本との貧富の  
差を感じて、今の自分の状況  
をありがたいと受け止めた。  
だからこそ、娘さんは普段と

変わらない夕食を前にして、  
その食事、そして食べさせて  
くれる両親への感謝の思いで  
涙をこぼしたそうです。そう  
いう教育を学校がしてくれた  
と感謝されました。今年度は  
コロナ禍で海外研修は中止し  
ましたが、生徒たちにはこう  
いう体験、学びの場をこれか  
らも提供していきたいと思い

ます。

**雨谷** 食べられること、食事  
を作ってくれる人がいること  
に思いを馳せる…。そういう  
気づきって本当に大切。なん  
でもみんな当たり前だったら、  
幸せがどこにもない。誰かが  
してくれたことに対して「あ  
りがとう」と思ったら、その  
瞬間に幸せな気持ちになるわ  
けですから。

**中野** 今まで当たり前だった  
ことのありがたさに気がつく  
と、次は「恩返し」のような  
形で、何か自分にできること  
がないかと、いい行動ができ  
ると思うんです。そのお父さ  
んが続けて教えてくれたのは、  
近所の知り合いのご高齢の女  
性が道で転んだのを、たまた  
ま通りかかった娘さんが助け  
起こすと、「○○さんの娘さん  
ね」とお父さんの名前を言っ  
てくださったそうです。恩返  
しとは違うかもしれないけど、  
誰かのためにという気持ちで  
とった行動で、その女性もう  
れしくて、娘から報告を受け  
たお父さんもうれしくなる。  
そういう恩返し循環がつか  
なっていく世の中になるとい  
いですよね。

**雨谷** 悪くなるとどんどん悪

くなって負のスパイラルで落  
ちてしまいますが、何かのき  
っかけでいいことがあれば、  
どんどんよくなっていきます。  
コロナも逆手にとって、いい  
スパイラルに持っていつて切  
り抜きたいですね。何ヵ月か  
人に会うことを自粛している  
と、疑心暗鬼になってしまっ  
たりして、家族ですら会えな  
いような状況が続いて、人間  
ってこれでもいいのかなあと疑  
問に感じました。いくら電話  
で話しても、やっぱり直接会  
うからこそ感じるものがあつ  
たりする。仕事によってはオ  
ンラインのほうが効率的に進  
むものもあるのかもしれない  
んが。お酒を一緒に飲んだり  
すると、話が思ってもいなか  
ったほうに進んでいって、い  
いスパイラルが生まれたりす  
ることもあったりして(笑)。

**中野** 効率だけではない、直  
接会って話をして、お互いの  
ぬくもりや表情で感じること  
は本当に大事なことです。そ  
う考えると、今の状況下の子  
どもたちはかわいそう。特に  
一年生は入学してすぐに休校  
になって、いざ再開しても、  
友達がいるわけじゃないし。  
卒業する子どもたちもそうで

したね。オイスカ高校でも例  
年は体育館で盛大に卒業式が  
行われるのに、生徒たちは各  
クラスで放送を通じての式に  
臨みました。「よく頑張ったね」  
と卒業生を送り出せず残念で  
した。でも、悪いことばかり  
じゃなくて、雨谷さんがおっ  
しゃった、いいスパイラルみ  
たいなものも生まれています。  
モンゴルでは、今までロシア  
や中国から買っていた農産物  
がストップしてしまったこと  
で、現地では「食べるものを  
自分たちで作る」という新し  
い挑戦が始まりました。家庭  
菜園で、自分たちの手で野菜  
が育てられるよう、オイスカ  
の訪日研修生OBたちが中心  
になって野菜の種や道具を支  
援して、彼らが各家庭を回っ  
て、育て方を指導しました。  
今までは輸入された野菜がど  
うやって作られていたかなど、  
気にかけることなく食べてい  
た住民たちが、自分で育てた  
新鮮な野菜をそのままキッチ  
ンに運んで食べるという新し  
い経験を通じて、食べるもの  
に対する意識を高めることが  
できた。コロナ禍で国境が閉  
ざされて、人も動けない、物  
も動かせないという中だから

こそ生まれた新しい動きや価値観です。こういう報告を受けると、コロナも悪いだけじゃないなと思えます。

**雨谷** そうですね。いろいろなところから学ばないともつたないです。でも、学校の卒業式や入学式は大きな節目の儀式でけじめでもあるから、それが本来の形でできなかったのは本当に残念でしたね。日本には二十四節気がありますが、そういう節目も大切。それをちゃんとやると人生にメリハリがでてきて、だらだらつとした一年間にはならないと思います。

**中野** 曆もそう。月の区切りがなかったならば365日が過ぎてもなんの感慨もない。でも日本は特に季節の移り変わりがはっきりしていますから、節目ごとにけじめがつくというのがいいですよ。

**中野** 音に関して何か日本と海外で感性の違いのようなものを感じることはありませんか。  
**雨谷** クラシック音楽にはみんなテンポがあるんですが、

邦楽は完全に間合いの音楽です。間が勝負。楽譜に書けないものです。そんな間合いができるのは、日本人の感性が鋭かったからだと思います。あとは、お座敷のような狭い場所でも演奏されていたというのもあるかもしれません。海外では、国境を越えたらすぐ違う国だから、違う民族でも分かるものを編み出す努力が必要で、それで誰でもわかるピアノができました。楽譜を作って、指揮者がいれば、みんなで一斉に演奏できるのもそう。西洋の音楽は、そういうものを目指してきたから邦楽とは全然違います。私は4年前から「美しい地球は私たちの心のハーモニーから」をテーマにしている、このハーモニーというのは調和という意味ですよ。オイスカが目指している、宗教や国籍を超えて、人が

# 音楽でつながる世界

心をついに助け合うことも調和だ

と思います。音楽と森づくりは全然違うものだけど、一緒に木を植えれば同じ気持ちになれるし、一緒に歌えば同じ気持ちになれる。音楽ってそ

ういう意味では、人の心のハーモニーを生み出せるものだと思います。もちろんその国の言葉で歌ったらもっと親密な感じは出ますが、そうじゃなくても一緒に気持ちになれるんです。

**中野** ピアノがそういう背景で生まれたとは知りませんでした。

**雨谷** そう、国を超えてみんながわかるようにと作られたものなんです。でも声はピアノの音とは違います。人の声だとシと下の間にいっばい音があつて、シをちよつと高めに歌うと、すぐよくハモって聞こえたりします。そういう点では、ピアノって人間的ではない楽器ともいえるけど、合わせようと思うと合わせやすい楽器です。

**中野** 雨谷さんはコンサートでどんな歌を歌われるんですか。

**雨谷** オペラはもちろんですが、日本の童謡も歌います。オリジナルソング「僕にできること」は、森のことを歌った歌ですが、小学五年生の音楽の教科書にも載りました。それに、私、ヒンディー語の歌も得意なんです。インド



30周年記念リサイタルの様子

のナレンドラ・モデイ首相が、グジャラート州の州知事だった時に、アーメダバードで開催された経済サミットに呼ばれて5千人ぐらいの前で歌いました。有名な映画音楽で、

インドのミスユニバースの女性が主演したので、世界的に有名だったらしく、歌い始めた途端にインド以外の国の人たちも、うわーって盛り上がりつつあって。

**中野** 5千人はすごい迫力ですね。歌はどうやって覚えた

んですか。

**雨谷** 日本で結婚パーティーをするというインドの方から、歌ってほしいと依頼されたのがきっかけです。前日にその方から電話があつて、できたらインドの歌を歌ってほしいと。1曲を選んで聞かせてもらい、ネットで調べたら、歌詞がカタカナで載っていました。映画の中ではみんなで踊る曲で、長いんですが、それを東京から横浜に帰る間、面白い曲だなあと思いつながら

Dを聞いていたら自然に入っちゃったんです。それで当日歌ったら新郎さんが寄ってきて、「雨谷さん、インド人がみんなびっくりしているよ」って。それがきっかけで、何度かインド関連のイベントで歌わせてもらいました。モデイさんに呼ばれたのも、来日時に私が歌ったのを聞いてくださっていたからです。今は2曲歌えます。インドの人の前で歌うと、みんな驚いて、「なんで？」って寄ってくる。「ヒンディー語、話せるの？」とも聞かれますが、しゃべれません。歌うだけです(笑)。

**中野** 私も海外の方が日本語で「さくらさくら」なんて歌ってくれたら感激しますからね、それと同じことかしら。

**雨谷** そうなんです。だから自分はラッキーだと思っています。一生懸命語学を勉強しなくても、歌うことで国境を超えられる。旅行でフィジーに行った時にもホテルの方と話をしていた、インドの歌が歌えるって話になって、ちょっと歌ったらみんな「それ知ってる！」って、盛り上がりました。

**中野** フィジーにもインド系の方が多くですね。

**雨谷** 急に外国の言葉をしゃべることはできないけど、歌だったら、例えばルーマニアのこの歌を歌ってって言われれば、歌を聞いて覚えて、ちょっと発音を直してもらえば歌うことはできます。そんなふうには交流ができるというのはありがたいことです。

**中野** それにしても一晩で覚えるってすごいことですね。

**雨谷** チンドン屋みたいで面白い曲だったんです。チンチンと楽器が鳴っていて、周りでみんなが歌っているのが「ヨイヤサーー！」みたいな合いの手のように、大地からパワーが湧き上がってくるような元気が出る曲でした。これから発展して行こうという勢いのある経済イベントでしたから、盛り上がりによってよかったです。「僕にできること」も英語で歌わせてもらったんですが、この雰囲気の中で、歌のメッセージが伝わるのかなあという思いも正直ありました。でも、あのインドの混沌とした巨大なパワーの中で、曲のイントロが流れた瞬間、神社のシャンシャンって鈴がなった

ような清浄な空気に包まれた気がして、ちょっとほろっときちゃいましたね。都市計画も木を植えることも本来はセツトでやらないといけないのかもしれないけど、目先のことがどうしても優先されてしまっているのは仕方がない面もあるのでしょうか。

**中野** 日本も同じです。経済発展を目指して突っ走った結果、公害が出たりして。何が本当に自分たちの自立、発展のために必要なかを立ち止まって考えないといけません。そのためには時間もかかりません。オイスカがタイで進めてきたプロジェクトの活動成果として、ため池で養魚ができるようになったり、養蜂ができるようになったりして地域住民の生計向上につながったとの報告を聞きました。それだけだと「それはよかったね」で終わってしまう話ですが、きちんとプロジェクトの歴史を聞くと、その村にはもともとため池があったのに、森がなくなっただけで水がなくなってしまうたそうなんです。そこで、オイスカが支援をして植林を始めて、毎年日本人も現地に赴いて村の人と一緒に



大きく育った森の木陰で山菜を栽培する地域住民(タイ)

に植林を続けてきた。少しずつ森が豊かになったら、ため池に水が貯まるようになって、じゃあまた昔のように魚の養殖ができるねって養魚が再開できた。養蜂もそう。森に咲く花で蜂蜜が採れるようになった、ほかにも林床で山菜も採れるようになった。それは、20年以上前から森を育ててきた村の歴史があつて成り立つプロジェクトなんです。そんなふうに時間はかかるけれど、自分たちの村を自分たちの手

で豊かにしてきた歴史を、子どもたちにしっかりと伝えていくことで、森が守られ、村の生活も守られていくのだと思います。

**雨谷** 森は豊かになる源。豊かな森を作る行動を誰かが始めなければならぬ。行動しながらそれを語り継いで、後世につなげていくことが大事です。バトンを渡していくように。

**中野** CFPももう30年になります。子どもたちの時に学校



子どもから親に、親から子どもに。スリランカでは、植林活動には親子で参加をしてもらっている

で木を植えた体験を持つ先生が、自分の赴任先の学校で植林を始めたりして、次の世代につながるっていつています。そうやって活動を循環させていくことが大事ですね。  
**雨谷** やっぱり未来を生きる子どもたちに伝えていく、つなげていくことですね。「僕にできること」という歌には、「人も鳥も花もみんな生きてる、いのちの根っ子でつながって」という歌詞があるんですが、これを歌い継いで世界のの人たちに伝えていけたら、戦争もなくなるかなあって。「美しい地球は私達の心のハ

ーモニールから」というテーマでコンサートをしています。音楽は国境を超えて理解し合える最高の手段です。世界の人々の心が調和され、自然も人間も元気に生きていける、そんな世の中になることを心から祈っています。  
**中野** 節目ごとに立ち止まって振り返り、原点に立ち返りながら、次の世代に日本の素晴らしい自然環境、日本人の精神性、そして私たちの活動をしっかりとつないでいけるよう、これからも共に頑張っていきたいと思います。今日はありがとうございました。



## オイスカ・インターナショナル 第三代総裁就任ご挨拶



第二代オイスカ・インターナショナル中野良子総裁の遺志により、昨年11月、その職務を引き継ぎました。

公益財団法人オイスカは、日本の国際協力団体として、人材育成、農業開発、植林、教育などの国際協力事業を行っておりますが、オイスカ・インターナショナルは、オイスカ支援者、理解者が各国で同様に活動できるように激励し、その考え方、価値観を普及する目的を持つ運動体です。

先代総裁は「利他的精神」の大切さを繰り返し述べておりました。そのことは、持続可能な未来の発展を考え、国や文化を超えた協力を促進するために、とても重要な価値観であると思っております。

「ふるさとづくり」は、オイスカ運動の大きなテーマです。ふるさとは、人々のそれぞれの村、町であり、国です。そして全人類にとっては、母なる地球がふるさとです。そのふるさとの大自然の中に生を享け、生かされていることに感謝し、その恩返しとして未来を生きる子どもたちのために、より豊かな自然を育てていきたいと考えております。そして、すべての生き物たちが、与えられた寿命を全うできるような社会の構築を目指すとともに、そのような未来を担う若い世代の教育にも力を尽くしてまいりたいと思っております。

このような活動に、皆さまのご理解とご支援、またご参加を心よりお願い申し上げます。

中野悦子